

トヨタカローラ中京

KUO
GROUP



SUPER FORMULA **LIGHTS** RACE REPORT

Rd.1/Rd.2/Rd.3 @Twinring MOTEGI

TEAM
TOM'S

予選 | レース内容

TOM'S

8月30日 (日) / 来場者3,500人

天候：晴れ・ドライ / 気温：31-32℃ / 路面温度：45-48℃

昨年までの全日本F3選手権シリーズは、名称を全日本スーパーフォーミュライツへと変更。今シーズンの開幕戦の舞台は、ツインリンクもてぎ。カロラ中京Kuo TEAM TOM'Sのドライバーのラインアップは、昨年と同じ36号車に宮田莉朋、37号者に小高一斗。昨年惜しくもチャンピオン獲得を逃した宮田とフル参戦2年目に初優勝を目指す小高。猛暑の中展開された予選では、2台が見事に第1戦、第2戦のポールポジション、セカンドポジションを独占。両レースの決勝レースをフロントローからスタートすることとなった。



- 今シーズンの初イベントは、いきなり3連戦。
- 車両は、ドライバーを保護するヘイローの装着など、安全性を高めたダラーラ320のワンメイク。タイヤは従来通り横浜タイヤを装着する。
- ベストタイムによって第1戦のグリッド順位、セカンドタイムで第2戦の順位が決定。第3戦のグリッドは、第1戦の決勝レース順位で決定される。
- 30分間の予選。開始から勢よくコースインした2台。宮田がトップタイムをマーク。これに続いて小高が1分45秒219で2番手につけて、この段階でチームが1-2ポジションを奪取した。
- タイヤウォームアップを終えて、宮田は、1分44秒台を連発。小高も44秒台に突入。ベストタイム、セカンドタイムでフロントローを独占した。
- 1分44秒台に突入したドライバーは、宮田と小高のみだった。

Driver	Car No.	Q1	Q2
宮田 莉朋	36	P1 1'44.514	P1 1'44.826
小高 一斗	37	P2 1'44.962	P2 1'45.219

8月30日 (日) / 来場者3,500人

天候：晴れ・ドライ / 気温：31-32℃ / 路面温度：45-48℃



宮田 莉朋

36号車ドライバー

今シーズンは、絶対的に走行時間が少なかったので、走るたびに新しいセッティングの要素が見つかったり、イレギュラーなトラブルが出たりしていました。セッティングの方向性は良かったのですが、セッティングの要素が多くなった分、悩んでしまったりして、金曜日の最後のセッションまではトップタイムを出せない状況がありました。路面温度もかなり高い状況でしたから1セット目のタイヤから2セット目でタイムアップができるかどうかは自信がなかったのですが、フロントサスペンションのセットを少しだけ変えてもらったら、それがとても良く、路面のコンディションもタイヤのグリップがピークの時とマッチしてタイムアップすることができました。ニューマシンの状況をまだ完全に把握し切れていない中でなんとか2つのポールポジションを獲得できて良かったです。



小高 一斗

37号車ドライバー

ミスが多く、ニュータイヤを履いた時の恐怖心というか、また失敗しないようにという気持ちが強くて、予選で絶対にミスしなきゃダメだと自分に言い聞かせていました。チームからも力まずに8割の力で行けと言われていました。1セット目は、8割くらいの感じで走って感触はまあまあだったのですが、車のバランスで走りにくいところがあって、そこを改善するべくセットアップを変更してもらってから2セット目のタイヤでアタック。44秒台に突入した周はセクター1と2が良かったのですが、セクター3のヘアピンでシフトミスしてしまい、セクター4の90度コーナーでは、ミスを補おうとして行きすぎてしまいました。金曜日までの流れから見れば、2番手のタイムまで上がってこれたのは嬉しいのですが、失敗がなければ、ポールポジションにも手が届くのではないかとと思うと、とても悔しい予選でした。



吉武 聡

エンジニア

開幕戦を迎えて、木曜日から練習走行を開始、最初は、ライバルがかなり速くて、置いていかれるセッションもあったのですが、セクタータイムを総合すると莉朋もほぼ同タイムでした。そして金曜日に良いセッティングが見つかって、そこから今回の予選ポールポジションとセカンド奪取に繋がりましたね。特に路面温度が上がると、われわれの方が速いですね。莉朋は、1セット目で感触を掴み、2セット目でトラフィックの間隔を見計らってコースイン。見事に44秒台のタイムを連ねてくれました。一斗も44秒台を記録した周は、セクター1、2では莉朋のタイムを上回っていたのですが、その先のセクターで失敗してしまったようです。その辺がまだまだですね。一斗に8割くらいの感じでアタックしろと言って送り出したのですが……。まずは、フロントローに並べてホツとしています。



山田 淳

チーム監督

今シーズンからニューマシンとなり、ツインリンクもてぎの走り出しからセッティングを見出すのに苦労しています。木曜日からの走行で気温と路面温度が変化して、それぞれに合わせると、そのレンジから外れるとセッティングが合わないという状況でした。その中間というか、セッティングを戻すことによって、最終的に金曜日の最後の練習走行で、ようやくセッティングが決まり、土曜日の予選を迎えられました。莉朋はそこで44秒台を連発して、ニューマシンでも速さを発揮してくれました。一斗も一発だけでしたが44秒台をマークしています。しかし、そのラップでもミスを犯してしまっています。まだ、1ラップを通して最高のパフォーマンスを発揮できていません。ミスがなければ、莉朋と同等タイムをマークできていた可能性が高いので、惜しいことをしてしまいました。ニューマシンの初戦でフロントローを独占できて、TOM'Sのチーム力を示すことができました。

決勝 | レース内容

TOM'S

8月30日 (日) / 来場者4,800人

天候：晴れ・ドライ / 気温：35-32℃ / 路面温度：47-41℃

2020年全日本スーパーフォーミュライツの開幕3連戦においてカロラ中京Kuo TEAM TOM'Sの36号車を駆る宮田莉朋は、3戦全てをポールポジションからスタートし、トップを快走、一度もトップの座を他車に譲ることなく、決勝レース中のファステストラップタイムを記録、そして3勝というパーフェクトな結果を残した。37号車の小高一斗は、第1戦でスタートに失敗し4位、第2戦はスタートポジションをキープして2位。そして第3戦はスタートポジションをアップして3位でフィニッシュした。



- 第1戦は、この三連戦で最長の20周レース。
- 宮田は、スタートから後続を毎週引き離す快走を見せて大量リード、2位に12秒4の大差でまず初戦を制した。
- 小高は、スタートでエンジンストール寸前の状態となって出遅れて、2つポジションを下げてしまい中盤から3位のマシンに迫ったが、4位のままゴールした。
- 第2戦のスタートでも宮田は危なげないスタートから二番手スタートの小高との差を開いた。14周レースで2位小高に9秒3の差をつけて独走優勝。
- 第2戦と同じく14周で行われた第3戦も宮田は後続を引き離す独走を見せて3勝目を記録。3つのポールポジション。3つのファステストラップ。そして3勝とパーフェクトな週末を締めくくった。

Driver	Car No.	Rd.1 / Fastest Lap	Rd.2 / Fastest Lap	Rd.3 / Fastest Lap
宮田 莉朋	36	P1 1'46.166	P1 1'45.495	P1 1'45.461
小高 一斗	37	P4 1'47.410	P2 1'46.175	P3 1'46.625

8月30日 (日) / 来場者4,800人

天候：晴れ・ドライ / 気温：35-32℃ / 路面温度：47-41℃



宮田 莉朋

36号車ドライバー

結果として三つのパーフェクトで終わられて良かったです。最終レースではセッティングの良い部分を見出すことができて、それも良かったです。結果は良かったのですが、常に上を望んでチームとともにマシン（セッティング）を良くする努力をして、満足することは良くないと思い、自分は常に崖っぷちに立たされているという気持ちで走っていました。ニューマシンによる今シーズン初のレースでしたから、この結果はある面予想以上です。一步でも前に進むことが重要ですから、セッティングの方向性が見えたことは嬉しい結果でもあります。毎晩遅くまでマシンを整備、仕上げてくれたチームに感謝です。



小高 一斗

37号車ドライバー

1レース目のスタートでは、大失敗。ギリギリでエンジンがストールすることはなかったけれど、エンジン回転が落ちてからの再スタート状態ですから1コーナーまでのスピードが多分20キロくらい遅くて抜かれました。自分のブロックも甘かったと反省しています。しっかりとイン側を閉めていれば抜かれなかったかもしれません。宮田選手のスタートも決して良くなかったので、前に出るチャンスだったのに悔しいです。2戦目は、スタートは良くて宮田選手について行けたのにレースペースが悪くなってジワジワ離れてしまいました。第3戦は、スタートが良くてすぐにポジションアップできたのに、やはりレースペースが悪くて、高星選手に追われる展開となり、必死にポジションキープし、なんとか表彰台に立てました。しかし、週末を通じて調子が悪くて、なんとか予選では2番手を獲りましたが、決勝では、苦戦しました。次戦の岡山では改善して頑張ります。



吉武 聡

エンジニア

莉朋が3つのフルポイント、一斗が2回の表彰台とまずまずという結果だと判断していますけれど、この開幕戦では、いろいろとトラブルが多発していて、それを修正しながら予選、決勝に臨んでもらうという状況でサポートが大変でした。メカニックは毎晩遅くまでチェック、修正に追われて、本当に疲れました。ニューマシンの初実戦ですから、実際に走ってみなければ分からなかった。振動によって壊れてしまった箇所があったり、舞台裏は大変でした。目標は全戦TOM'Sの1-2でしたが、それが達成できませんでした。ガレージに帰ってマシンのチェック、次戦に向けての準備は、例年以上に大変だと思いますが、岡山では、1-2フィニッシュを達成してもらえるように万全の体制、マシンで臨みます。



山田 淳

チーム監督

今シーズンの参加者の顔ぶれを見れば、お分かりのように莉朋にとっては、ポールポジションを獲得して当然、優勝して当然なのです。この点では3レースともにポールからスタートして優勝、ファステストラップを記録するという最低限の結果を残すことができました。しかし、彼に求めているのはそれだけではないのです。スタートも全て決まったように見えますが、完璧なスタートでは無かった。レース中もっとラップタイムをアップすることもできたと思います。昨年のように強力なライバルが居ることを想定すると、どうだったでしょう？彼にとって、今シーズンは自分との戦いです。全戦でパーフェクトな結果を目標としてほしい。今日の莉朋の点数は95点ですね。一斗は、2年目で莉朋にもっと挑んで欲しかった。2台ともに基本は同じセッティングをしていますから、1年目の経験が生かされていなかった。コロナ禍の影響でフォーミュラカーを乗る時間が制限されてしまったことが影響してしまったのかな。しかし、成長の度合いを示してくれていませんね。速さはある、それは事実です。しかし、スタートからゴールまでをまとめ切ることができていない。フォーミュラレースの前にツーリングカーで走ることが多かったので、ツーリングカーとフォーミュラカーの間で迷ってしまい、それを修正するのに時間がかった週末でした。